
君は天然色

ミラージュ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は天然色

【著者名】

【作者名】
ミラージュ

【著者名】
N5275F

【あらすじ】

君は僕の記憶に鮮明な思い出を残していった。華やかな七色の天然色と共に。覆面小説家になろう2008秋【空】ブロック参加作品です。

九月。

季節の変わり目を迎えるこの時期は、空を雲が覆い景色から鮮やかな秋の色彩を奪い取る。

せつかくの休日も気紛れなにわか雨に外出の機会を足止めされ、この空と同じ様にモノクロームな僕の心の屋根にもザーザーと鋭い水針を突き刺してくる。

冷たさが染みる傷口を癒やすよつて、僕は淡い恋心の思い出が詰まつた一枚のアルバムを開く。

色鮮やかな七色の天然色と共に、今も変わらず僕に笑いかけてくれる君のその姿はとても愛らしく、そしてとても美しい。

赤。

梅雨の鬱陶しい雨の日でも、真っ赤な傘をクルクルと回しながら楽しそうに雨の街を歩く君の姿に、僕は初恋にも近いときめきを抱いた。

橙。

遊園地で大好きなオレンジジュースを飲みながら、満面の笑みを見せてくれた君の姿に、僕は一瞬で五感の全てを奪われてしまった。

黄。

真夏の海水浴場、眩しい黄色の水着姿で楽しそうにはしゃぐ君の姿に、僕は釘付けになりながらも君を見る周りの他の男性達に軽く嫉妬した。

緑。

心地良い風に吹かれ、辺りの森林のざわめきに目を閉じ耳を澄ませる君の姿に、僕は春風が遣わさせた森の妖精の姿に錯覚した。

青。

街中が賑やかな青いネオンサインで飾られたクリスマスの日、僕の帰りを待ちきれずにサンタの人形を抱いて静かに寝息を立てる君の姿に、僕はこの幸せな時間がこのまま止まつてくれないものかと心から願つた。

藍。

桜が咲き乱れる高校の卒業式、藍色のセーラー服に卒業表彰を持つてこちらにピースサインをする君の姿に、僕は君と一緒に過ごしてきた時代の流れの早さを改めて痛感させられた。

紫。

一月の雪が降り積もる成人式、すっかり大人の女性になり紫基調の美しい和服姿に身を包んでこちらに振り返る君の姿に、僕は改めて恋に落ちた。

君に初めて出逢つてから、僕の人生は君だけの為にあつたようなものだつた。

君が笑ってくれるなら、君の笑顔を守る為なら、僕はどんなに辛い事でも立ち向かう事が出来た。

世界中の誰よりも、どんな勇敢な戦士よりも、どんな名声高き権力者よりも強い存在でいられる事が出来た。

君の楽しそうにはしゃぐ姿を見ると、僕も一緒に嬉しくなつて天にも上る様な幸せな気分になれた。

君の悲しみで涙にくれる姿を見ると、僕も一緒に苦しくなつて自分の無力さが悔しくて情けなくなつた。

全ての喜怒哀楽を一緒に体験して、時にはつまらない事で折り合

いがつかなくなつてケンカした時だつてあつた。

ある時は君がわがままを言つて僕を困らせたり、ある時は僕が大切に想うあまりに君を無理に束縛してしまつたり。

でも、優しい君は最後は笑つて許してくれると、仲直りのしるとしていつも僕の頬にキスをしてくれた。

はにかみながら少し恥ずかしそうに振る舞つその姿に、僕もすっかりそれまでの事を忘れ君を許してしまつ。

僕はいつも君の秋風みたいな無邪気な氣まぐれに振り回されて、まるで風見鶏の様に右へ左へクルクルと向きを変えられてばかりだつた。

のんびり屋の僕とは対照的に、せつかちで元気一杯の君はいつも僕の手を無理矢理引っ張つて先を急かしてばかりだつた。

でも、それが嬉しかつた。僕の手を握る君の手のひらはとても暖かくて、そして何より優しかつた。君と手を繋いで同じ道を歩く事が、僕の一番の幸せだつた。

いつまでもこうしていたいと思つた。いつまでもずっと一緒に手を繋いでいたいと思つた。いられると思つた。

でも、それは叶わない夢だつた。いつしか僕らの目の前に現れた一本の分かれ道で、君は僕の手を離れもう一本の別の道へと歩んでいつてしまつた。

その場に立ち尽くす僕を一人置いて、君は振り向きもせずに自らの意志で決めた道を進んでいく。最後にただ一つ、泣きながら別れの言葉を僕に伝えて。

決して叶う事の無い淡い片思いだつた。そんな事は最初からわかつっていた。でも、それでも僕は君と同じ時間を過ごせた事が幸せだつた。君に恋心を抱けた事がとても幸せだつた。

きっと僕はこの先将来、こんな素敵な恋に巡り会える事は一度と無いだろ。君と分かち合えた思い出の数々は、一生かけても決し

て忘れる事は無いだろ？。

どんな脚本家でも書く事の出来ない君と僕との最高のラブストーリーは、こうして最後の幕を降ろしたんだ。観客のいない静かな舞台上に、たった一人僕だけを残して。

「今までそんな寝ぼけた事を仰られているんですか？いい加減、もうそろそろ立ち直つたらどうですか？」

アルバムを眺める僕の横で、女房が呆れた顔をして居間のちゃぶ台を布巾で磨いている。その上には、湯気が立つ煎れ立てのお茶が注がれた湯呑みが置かれてあつた。

「恋だの愛だの、もうそんな甘い話をしている歳でもないじゃないですか？若い娘に夢中になるのもいいですけど、少しほの自分の女房に対してもそれくらい熱くなつて欲しいのですけどね？」

湯呑みの中に立つ茶柱の様に、女房の鋭い僻みが更に失恋の傷をチクリチクリと刺してくる。僕が大きな溜め息を一つ吐くと、女房は見え透いた様に苦笑し一言漏らした。

「大切な可愛い一人娘を嫁に取られて寂しいのは私だつてそうですけどね、もう披露宴から三ヶ月も経っているんですよ？いつまでもそんなにクヨクヨしてたつて仕方がないじゃないですか、お父さん？」

「まあ、そうなんだがな……」

「あの子は小さい頃から可愛いお嫁さんになるのが夢だつたつて言ってたじやない？あなただつて良く御存知の筈よ？その夢が叶つたんだから、あなたも少しは喜んであげ下さいな？」

「お父さんのお嫁さんになりたいって言ってたんだ、あんな男の嫁になりたいなんて言つてない」

「あらまあ往生際の悪い人であること、あの子が自分で選んだ男性なんですから間違いなんてありませんよ？眞面目で優しいいい人じゃないですか、残念ですけどあなたの負けですよ」

「むう……」

女房に諭されて簞笥の上にある写真立てに目をやると、そこには素敵な衣装を纏つた君の姿が写っていた。その衣装の色は、このアルバムの中には無かつた最も美しく眩い天然色。

「あの子、本当に綺麗な花嫁姿だったわね？白いウエディングドレスが良く似合つて……」

七色の色は全て混ぜ合わせると白色へと変わる。これが答えだつたんだ。君は七色の思い出を織り重ねて一人の女性へと成長して、最後にこの素敵な純白のドレスを身に纏つたんだね。

『お父さん、今まで本当にありがとうございました』

君のこの言葉で僕は夢から覚めた。でも、例え夢だったとしても僕は君に出逢えた事を心から感謝している。

君の父親になれて良かつた。君の初恋の相手になれて本当に良かった。こちらこそ、素敵な思い出をたくさん、本当にありがとうございました。どうか世界で一番幸せな女性になってくれ。これが僕から君への最後の願い、最後の告白、最後の愛情だ。

そして、これが君との恋の最後の決別の言葉。君は僕の青春そのものだった。かけがえのないたくさんときめきを、本当に、本当にありがとうございました。

「しかし、あなたも懲りない人ですね？あの子が赤ちゃんを授かったと聞くや、まだ性別もわかつてないのに勝手に女の子用のベビー

服とおもちゃをプレゼントに買つておちやうんですか？」「もし男の子だつたらどうするおつもりですか？」

「いや、生まれてくる孫は絶対に女の子じゃなきや認めない、あの娘だからきっと可愛い女の子になるわ？」

「あらまあ呆れた！今からこの調子じや先が思いやられますね、本当に困つた恋多きおじいちゃんのこと……」

雨はいつの間にかすっかりと止み、雲の切れ目からは晴空が覗いていた。そこに綺麗な七色の虹が掛け、笑顔でその橋をはしゃぎながら渡る君の姿が見えた気がした。

煎れたばかりのお茶が喉を通り体の中を駆け巡る。熱い。どうやら心は熱さを忘れてはいよいよ。今度はどんな素敵な思い出を作ろつか？僕の恋の炎はまだまだこれからも消えそうに無い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5275f/>

君は天然色

2010年10月8日15時16分発行